

トキ野生復帰への道 放鳥・自然繁殖・死亡・ケガ・逃走…

◆第8回、第9回放鳥

6月7日(金)に8回目の放鳥を開始、同日14羽、9日に2羽、10日に1羽の計17羽が野生復帰ステーション順化ケージから飛び立ち、放鳥は無事終了。これまで125羽が放たれ、81羽の生存が確認されているが、オス43羽、メス29羽とメスの割合が少ないため、メスを多く放鳥していく方針

9月27日から行われた9回目の放鳥では、オス3羽、メス14羽の計17羽すべてが29日までに飛び立ち、2日目に無事終了した。



環境省提供

◆「トキ野生復帰ロードマップ」策定。平成27年に60羽めざす

トキの野生復帰について専門家らが話し合う「トキ野生復帰分科会」が2月12日、市内で開かれ、野生復帰に向けた工程表が策定された。平成27年頃に60羽をめざし、今後、毎年7羽から10羽以上のトキを放鳥することなどが決められた。

◆順調な自然繁殖

昨年より10日ほど早く、2月28日に営巣を確認。4月までに16組が巣をつくり、そのうち14組のトキが抱卵した。昨年の倍以上の好成績に関係者は「野生復帰事業が順調に進んでいる証」とした。4月14日、放鳥トキのヒナが誕生。このヒナの親は兄妹ペアであることから繁殖が進めば病気に対する免疫力の低下などが予想され、トキ保護センターにいれた。今年も24ペアが巣をつくり、すべてのペアが卵を産み、そのうち5組の巣で14羽のヒナが孵化した。

◆3月30日、トキふれあいプラザがオープン、死亡事故も発生

550㎡のケージ内に自然に近い形で樹木が植えられ、池もあり、間近にトキが飛んだり、エサをついばむ姿を観察できる施設。近くでトキを見たいという観光客の要望に佐渡市が応えた。「トキまで、2センチ!」がキャッチコピー。施設内や通路の窓に特殊なガラスが使用され、トキからは人の姿が見えない仕組み。

オープン前には事故も続き、2月4日、佐渡トキ保護センターから移された4羽のうち1羽が、人の姿に驚いて飛び立ち、飛行中のトキと衝突し傷を負った。見学者10人が入口付近にいた。3月21日には、3歳のオスがネットに衝突して13m落下、内臓破裂で死んだ。人の姿に驚いた可能性もあった。

◆トキの死、相次ぐ。タヌキ・カラス・トビ・衝突

2月3日 住民がトキの死骸を発見。2歳のメスと確認された。林の中でトキの羽が散乱していて、タヌキに捕食された痕跡があり、死後、数日経っていた。3月7日にも放鳥トキの死骸が確認された。足羽や識別用の羽は見つからず、個体の特定はできなかった。放鳥トキの死骸が発見されたのは、6羽目。

3月7日には、8次放鳥に向けて野生復帰ステーションで訓練中の18羽のうち、1歳のメスが天井に設置されている収納箱に衝突して死亡。訓練中のトキが衝突で死んだのは4例目。鳥インフルエンザ簡易検査は陰性とのこと。5月24日には放鳥トキのメスのひながカラスに襲われて死ぬ。ひなの死は今年5羽目で、動物に襲われたのは初めて。28日には2011年に放鳥された3歳のオスが空中で2羽のトビに攻撃され、食べられた。トビが鳥を襲うのはきわめて珍しいという。

◆人口飼育のトキの幼鳥がケージから逃走

6月8日午前7時20分頃、佐渡トキ保護センターのケージを清掃中、開いていた扉から人口飼育の1羽が逃げた。4月22日生まれの幼鳥で、依然として発見されていない。飼育中のトキが逃げたのは今回が初めて。ドアの閉め忘れが原因。同センターでは安全管理を図るため、「脱出防止対策の徹底について」をまとめた。

◆トキ、中国へ帰る

1月27日(水)、中国との覚書に基づき、中国から供与されているトキから生まれた子7羽を中国に返還した。2000年に来た美美(メイメイ)の子と、2007年に来た華陽(ホワヤン)、溢水(イーシュイ)の子で、2012年と2013年生まれ。

「トキ踏んじやった米」のお申し込みを

11月15日から トキ踏んじやった米の限定販売。野平成25年産佐渡コシヒカリの新米で、この春にトキが田んぼに入り苗踏みが確認された農家の田んぼで生産されたものについて、朱鷺が歩いた田んぼの米を「朱鷺踏んじやった米」として限定販売開始。

朱鷺と暮らす郷づくり推進協議会・佐渡市・農協が連携し、農家がトキを守りながら農業を続けていることや、島全体で取り組んでいるトキと人との共生の社会づくりを消費者に知ってもらいたいと企画した。農家にとっても「トキが田んぼに来てよかった」「生きものの豊かな田んぼへの応援がある」と思えるように、そして、トキが入る田んぼに誇りを持ってほしいと考えている。

品名 朱鷺が歩いた田んぼのお米「朱鷺踏んじやった米」5kg

(2014佐渡田んぼのカレンダー・感謝状・証明書付)

販売数量: 800袋

価格: 4,500円(送料込)

店頭販売はなく、佐渡トキファンクラブのホームページで予約を受け付ける。

支払方法: 申し込みと請求書を送付、指定口座に振込む。(振込手数料負担)

※注文からお届けまで数週間かかる場合があるので、ご容赦を。

「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」の世界遺産登録をめざして

2010年11月に世界遺産暫定一覧表に記載された。2013年はトピックスはなかったが、登録に向けての作業は着々と進んでいる。10月6日(日)には「日本の金銀山と佐渡金銀山」と題して、北海道「美利河砂金採掘跡・カニカン岳金山跡」、山梨県「黒川金山」、島根県「石見銀山」、鹿児島県「山ヶ野金山」などの報告と交流が行われた。

11月10日(日)には、朱鷺メッセで国際シンポジウムが開かれ、これまでの学術委員会での議論や、資産の価値や登録に向けた課題について国内外の専門家が講演や討論を行った。佐渡市・新潟県の「佐渡を世界遺産にする会」の会員も増えて、これからは首都圏でも結成する。

放鳥トキ	野生化で誕生したトキ	
放鳥数	142	2012年生まれ 8
生存	86	生存扱い 8
行方不明	5	2013年生まれ 14
死亡扱い	43	生存扱い 4
死亡確認	6	収容 4
保護・収容	2	死亡 6

環境省ウェブサイトより。12月14日現在

目一つ観音

湯端中ノ浦にある観音堂は「目一つ観音」といわれている。今は途絶えてしまったが、昭和五十二年発行の『島の神・島の佛』(田中圭二著)には、次のように記されている。

「正月の十六日の夕方、まず観音堂の別当が池野平右衛門のところにあいつにくる。その晩、村人たちは観音堂にこもる。

夜中のこと、お堂の戸の穴から目一つの入道が堂の中をそつとぞく。正十二時、中にある信者たちは太鼓をたたき、はめ板を踏みならして一斉にトキをつくる。そのとき信者たちは柳の木の枝を手に手にもつてふる。柳にはひとつの伝えがある。その昔、堂の下の池野平右衛門の蓮田にカッパがあがって休んでいた。村人につかまったカッパは明日から毎日、その柳の木の下に魚をカギにつるしておくから帰してくれとたのんだ。その柳の木の枝を故事にならつてみんながもっているのである」

「両津市誌」では、カッパではなく、お堂の穴から覗く目一つ入道を追い払うとある。また天目(あまめ)一個命(ひとごころ)という製鉄の神様がいて、妖怪一つ目小僧の源にもなっているというが、この神と関わりがあるのかもわからない。(雅)



私は両津港の近くで生まれ育ち、人生の大半をここで過ごしている。周辺の誰もが両津を小さな港町だと言う。

江戸時代に金の積出港として小木が栄え、北前船寄港地として殷賑を極めた。それ以前は長く松ヶ崎が国津であり、その近辺の港が賑わった。日蓮や世阿弥が到着したのもその地だ。

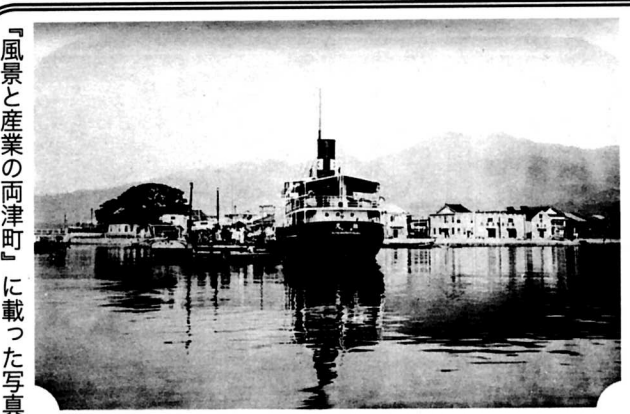
両津港物語 (1)

山茶花の港—佐渡夷港

佐渡夷港—なるタイトルで放映された。山茶花港の名づけ親は坂口仁一郎こと漢詩人坂口五峰、かの坂口安吾の父である。

当時の正式名称はあくまでも夷港、即ち、夷、湊の両町があり、港は夷町にあった。両津町となったのは明治三十四年、初代町長が北一輝の父慶太郎である。夷甚句と湊甚句が合体して両津甚句となったのもこの後だ。

夷港は、安政五年に函館・神奈川・兵庫・長崎と共に新潟が開港した時にその外港として世界にデビューし、明治三十二年には大阪港と共に独立港として日本の七開港場の一つとなった。(ダン渡辺@両津夷)



「風景と産業の両津町」に載った写真

私も薄々知っていたことはある。一見脈絡がないように思えるが、通底する何かがあるような臆(おそ)な直観である。

例えば、日本最初の鉄船は両津夷で建造され、日本最古の鉄製燈台は両津姫崎灯台だ。江戸末期の経世家山田方谷や、明治

いた三井物産創立者益田孝、東京海上火災創業者益田克徳を兄に持つ。

これまた、留学五人組の一人、山川捨松の兄で後の東大総長山川健次郎はこの島に逼塞していた時期がある。ハンセン病の父として顕彰されるレゼー神父は、若き日に夷町に滞在しキリスト教を布教する。実は、こんなことを書きたすと際限がない。そしてそれらは細い糸ながら強く結ばれている。

その全てが、両津港が如何